

第19回新生匠瑳戦略会議 会議録（概要版）

開催日時：平成24年10月17日（水）

午後7時00分～9時30分

開催場所：匠瑳市役所議会棟第2委員会室

出席委員：（学識経験者）鎌田元弘、木村乃、渡辺新

（団体推薦者）宇野充紘、萱森孝雄、越川竹晴、鈴木和彦、橋場永尚

（一般公募者）大塚榮一、岡田陽子、永野亮太、林暁男、八木幸市

（13人／名簿順）

欠席委員：（団体推薦者）安藤建子、越川八代枝

（2人／名簿順）

市出席者：太田市長、角田副市長、木内総務課長、

小川企画課長、大木企画課副主幹、富井企画課副主査（6人）

【 議 事 】

（1）部会の検討結果について（報告）

- ・里山・檀林部会については全2回の会議を行い、1回目はSWOT（スワット）という分析ツールを使って分析し、2回目はお客様目線で地域のことをいろいろと考えてみた。現状を分析し、目標や希望を整理した上で現状と希望のギャップを把握し、最後に具体的な行動課題をまとめた。
- ・商店街復権部会については全2回の会議を行い、中間報告で示されている商店街の活気を取り戻すための要素として、個店の経営問題と街並みという二つの観点から協議を行ったが、結論めいた答えは出なかった。
- ・部会と並行して行った調査で気づいたことは、伝統技術などの大量生産できない技術は必ず存在するので、こういうものを大事にしていかなければならないと思った。また、こういう技術を大事にしていきたいという気持ちを地元の人が持てるようになってほしい。
- ・例えば、農具は決まった店で購入し、家族それぞれが自分用にカスタマイズして使っているという話があった。誰もが量販店に売っている安価なもので、必ずしも満足できるとは限らないということである。
- ・空き店舗の活用も課題ではあるが、現在商売している人が継続していけるような持続可能なまちにしていきたいと思う。

- ・ 9月に飯高でNPOと組んで稲刈り体験を行った。都会には、里山の景観や暮らしに魅力を感じていて、移住を希望している若者もいるので、うまく市内へ呼び込めたらいいのではないかと。
- ・ 以前、中心市街地のマスタープランを作成すべきだと提案したが、話を聞いていると、成長を促していくマスタープランは多いのですが、きれいにしぼませていくマスタープランもあるのではないかと考えた。

(2) 提案書（最終報告）について

- ・ 提案書（最終報告）については、部会の内容を踏まえて構成を作ってみた。一部を除いて、文章化に関しては問題なくできそうだと感じている。
- ・ 最終報告では、中間報告作成の際に指摘された「あんなものがあつたらいい、こんなものがあつたらいい」という他人ごとの議論はしないようにすることと、市の実態とかけ離れたものを匠瑳市に当てはめないこと、以上2点を心掛けていく。
- ・ これからの匠瑳市の一つのあり方としては、現在の匠瑳市の動向と過去の動向からしか出てこないと考えた方がいいと思う。匠瑳市における市民の動向を見てみると、市民にとっては非常にありふれた日常の動きだと思っても、ヨソ者視点や専門的な視点で見れば新しい動向として認識できる場合がけっこうある。
- ・ 匠瑳市における新しい動向というのは、調査した限りでは、個々の生産者や市民の個別の努力による動きが中心だと思う。戦略会議では、この努力に対して少し後押しし、市民の自立性を担保した上でゆるやかに体系化できる方向性を示すことが重要である。個々の生産者や市民の「ものづくり」を「地域づくり」へと発展させる道を探ろうとするのが、最終報告の目的である。
- ・ 「地域の個性・資源を活かした地域づくり」では、項目として（1）グローバル化時代の匠瑳市、（2）“built in Sosa”に価値を有する地域社会、（3）地域内経済循環、（4）キーマンの必要性、の4つがあげられる。
- ・ 「“built in Sosa”に価値を有する地域社会」とは、例えば、「それはどこで造られたのですか」と聞かれて、「匠瑳市で造られた“built in Sosa”です」、これに価値を有するような社会経済基盤を創出していくことである。現状から言えば、この“built in Sosa”に値するのは、農林漁業を含めた地域経済・地場産業以外に考えられない。
- ・ 「地域内社会経済循環」においては、匠瑳市のエネルギーを含めた「地産地消」という発想を具体化することが重要で、市域の人材と資源を活用していくことで、自立あるいは自律した地域社会を構築することが可能である。

- ・「キーマンの必要性」においては、①地域づくり計画の策定等を行う自治体職員、②個性的な地域づくりに熱意を持った市民、③行政と市民の間にたって様々な活動を支援する中間支援者（伝道師）の3人の存在を指摘している。
- ・「農業・農村の新しい動向」では、匝瑳市の現状について述べている。項目として(1)「匝瑳市のブランド」の中で、①「匝瑳の舞」と“そうさの米研究会”、②「ひかりねぎ」の栽培、③赤ピーマンと若潮牛、の三つを例にあげている。
- ・消費者ニーズやライフスタイルが多様化する中でブランド化を進めるということは、単に産地間競争に勝つことによる農業収入の安定だけではなく、地域イメージの向上や観光等各種産業の収益拡大にも結びつき、匝瑳市の活性化にとって大きな役割を果たすことになる。
- ・川の流れに例えられている「フードシステム論」では、生産者を川上、消費者を川下としている。匝瑳市でも生産者側が川中、川下に事業領域を拡大しているが、その川中の典型的な例として、農産加工場がある。
- ・これまで農村における販売組織は出荷組織としての性格が強かったが、農業生産の付加価値というものは全体の約17%に過ぎなかった。農業生産者の経済主体としてのビジネスチャンスは、川中・川下への事業領域を拡大することで、本格的な営業活動を展開し、企画提案力を強めることである。
- ・「千葉県植木伝統樹芸士」や「千葉県植木銘木100選」に、匝瑳市の植木や職人が多数認定されていることからわかるように、匝瑳市の植木職人による伝統的造形技術は間違いなく地域資源の一つだと思う。
- ・匝瑳市の植木生産者は、新技術による植木生産方法の研究や活用も行っていて、バイオマスプラスチック製の生分解性植樹ポットの特性を活かす取り組みを行っている。産業廃棄物の抑制と作業効率の向上が目的ではあるが、植木に限定せず視野を広く持てばバイオマスプラスチックは様々な可能性を秘めている。
- ・「畜産・食品リサイクル」のところでは、畜産で他の分野への多角化を促進する要因として、環境負荷を軽減するための農業との連携が考えられるが、課題となるのは糞尿処理問題である。
- ・市内の食品リサイクル会社「エコ・フードシステム」では、大手コンビニエンスストアと提携することで、廃棄された食品を飼料に再生し、周辺の養豚農家に出荷している。廃棄物や糞尿などの bads (マイナスの価値の財) を再資源化して goods (プラスの価値の財) へ変換させることは、飼料や肥料の作成だけにとどまらない可能性を有している。
- ・「里山づくりと地域社会」のところでは、まず「里山の現状」を分析している。生物

- 多様性が豊かな里山は、人の生活から切り離されて、人手が加わらなくなることで荒廃しているのが現状で、同時に生息していた動植物の危機をも作りだしている。
- ・里山の活用事例として、①「谷津田を利用した米づくり」、②「ビオトープ」、③「教育の森」、④「炭焼き体験教室」などがあげられる。これをどうやって体系化していくかが問題だが、自然保護や生物多様性という環境保護の観点だけを考えていては、地元の人の生活が成り立たない。地元の人の生活や生産を考えた上で、地域資源を活かしたコミュニティビジネスを作っていくべきでない。
 - ・中心市街地においては、市内の小売店舗と従業者数の推移を比較した結果、現状として明らかに大型店の進出が見てとれる。さらに、店舗の種類を見てみると、衣料品および身の回り品に関するもの及び飲食料関係の店舗が多数を占めていることから、多様な人々が集う場所にするには、商店街も多様な商品で対応しなければならないと思う。また、その手法として空き店舗の活用方法についての道を模索すべきである。
 - ・商工会では、生産農家およびタイヘイ株式会社と提携して赤ピーマンのソースやドレッシングを試作している。これは、地域内の農業生産と食品産業の連携であり、今後の展開次第では地域内発型アグリビジネスへの発展が期待できる。
 - ・今日の農村が持続可能な農村になるための地域づくりでは、集落営農による農業生産だけではなく、川中・川下への事業領域拡大による農産加工や直売所で、グリーンツーリズムなどの様々なコミュニティビジネスに取り組む必要が出てくる。そのためには、地域内循環をつくり上げることが必要で、それぞれの団体をリンクさせる一つの組織として「匠瑛農業塾」の設置を提案したい。
 - ・里山については、生物多様性、ビジネス、体験農業など、多面的な価値が存在する。専門家、市民、行政など多様な人々を参加させ、それらのパートナーシップによる提案型・参加型の里づくり計画を策定する場として、「里づくり協議会」の設置を提案したい。
 - ・「商店街復権会議」については、戦略会議で行なった公開ミーティングの名称であるが、最終報告ではTMO (Town Management Organization) に該当する組織としての設置を提案したい。個店の経営や商業振興も重要なことではあるが、単なる商業振興ではなく、中心市街地の活性化という視点が必要である。
 - ・資料の図5で「復権 ようかいちば」はJ T跡地のことを指しているが、ここに市内で作られたブランドや里山で特産化されたもの、あるいはそういう物品だけでなく、木積の箕のような歴史的伝統技術なども集められたらと思う。重要なことは、どんな施設を造るかではなく、そこに交流というコンセプトを入れることである。

- ・ 匠瑳市でも空き家バンク事業を行なっているが、ただ登録を受け付けるだけではなく、例えばグリーンツーリズムの事業展開の中で空き家を活用していく方法なども考えるべきである。
- ・ 図に示されている「リサイクルセンター」の設立には、おそらく億単位のお金がかかると思われる。ただ、施設はできないとしても、ここはしくみのポイントになる部分なので、こういうシステムを構築していくことが重要だと考えている。
- ・ 「匠瑳市の地エネ」は地域エネルギーのことであるが、農業用水を利用した小水力発電の導入や、バイオマスで作られたものを燃料として利用していくことも可能性として考えられる。ただ、バイオマス燃料は、私たちの生活スタイルを変えるところまでいかないとコスト的に難しいと思う。
- ・ 海岸侵食問題については、「匠瑳の魅力ある海岸づくり会議」が発足されたことで、そちらの議論を見守るということになっている。海岸づくり会議では、今後の侵食状況について明確な回答を出していないが、個人的には侵食は徐々に進むものと思われるので、侵食されることを前提としたまちづくり、長期的な計画を作っていかなければならない。

(3) その他

次回の会議日程は 11 月 5 日（月）とし、午後 7 時から匠瑳市役所議会棟第 2 委員会室で行う。本日用なった最終報告の骨格についての協議を踏まえ、渡辺委員長が肉づけを行う。肉づけされた最終報告（案）を各委員へ事前送付し、内容を確認した上で次回の会議に出席する。